

ミーヨンが、つむぎだす — 石井 仁志 (メディア評論・メディアプロデューサー)

知人を介して、出会いは唐突にやってくる。2015年5月12日のことだ。自己紹介のあと、彼女は2冊の写真集を取り出して、わたくしの前にすっとおいた。…小説の中の大人の女性のように、眼前に現れた、ほぼ得体のしれぬ男に、どんな反応を示すだろうかという興味をたたえた目線を送る。と、ト書きでも入れたくなるような、自然な流れと鮮やかな登場だった。

そのうちの1冊、『Alone Together』の布張りの表紙の手触りと、その薄絹でぼんやりと浮かび上がったように相好を崩す娘の大きな顔、やんわりと見つめられる被写体からの笑顔は、観る、わたくしに鼓動を意識させた。この時、湧き上がったのが肌合いという言葉だった。まれなことに、ページを繰りながら写真展のイメージが観えていた。

この写真集の存在は知っていたが、この時が初見だ。引き込まれる。ミーヨンの視座が選り取ってゆく独特の距離感は、まるで細い糸のつらなりが束になったり、さらにほぐれたり、布のように織りあがったりしながら、関係性という物語の濃淡をつむぎだしていくかのよう。わたくしには脳幹の記憶、生命維持のかたわらに太古からの感覚を敷き詰めたタペストリーを見せられたような妙な感覚が宿った。決して不快ではない。むしろこのつづらおりの肌触りは、モノトーンの写真の表面の調子として、極上の肌合いを保ち続けてくれる。同調していく心地よさを感じる写真が連なってゆく。

明瞭な映像世界を、具象から抽象へ引っ張り込む、半具象の曖昧をあえて加味する視座。そういえば、彼女の表現が、思考回路が説けてくるだろうか。そこに、幅の広い言語表現、彼女の多彩な表現能力の具現化を、可視化することによってのみ解放へと導く手段として写真がある。客観視された自己は、「私」という主語を無限にときはなした。事象の中に溶け込んで観念となる手前で、観えてくる物語や詩の世界をミーヨンは写真化したのだろう。そこに表現された画像には、意識すると無意識の距離感や、存在と無の途方もない恐怖のような人間がしばられる、あらゆる原初的な懐疑にたいして、象徴としての像が、彼女によってつむぎだされていった。

イメージとしての相違は別としても、2冊目の『よもぎ草子』、そして『I AND THOU』という手製本の3冊目も、その本質的な思考の積み重ねの所で彼女の気質が生み出す作品の特徴を、きわめてよく受け継いでいる。わたくしにとって

『Alone Together』以来、3冊の写真集は、心地よい肌合いを常にもたらしてくれる極上の読み物なのである。まちがいない、そこには画像を通して響いてくる物語があり、詩があり、そして心象風景の底に流れるやさしい唄がある。

感性のバルブから解き放たれる自由な発想が、彼女の柔軟な写真世界で、たわわに実った果実として収穫される。

そんな時間の推移が、幾層にも重なって、この絵屋の空間に現出する。試されるのは観る者としてのあなたと、作品との肌合いではなからうか。